

2 石器

1) 森川 3 遺跡のすり石について (図Ⅵ-4)

ここで扱うすり石は所謂「断面三角形のすり石」である。「断面三角形のすり石」については、形態・使用痕は位置について規則性があることはその特徴的な形状からよく知られている。形態的特徴は以下のようにまとめられる。

：形態は断面三角形の角柱状である。

：すり面の位置については断面三角形の稜部分に認められ、すり面は 1 ヲ所のものが多いが 2 ～ 3 ヲ所に認められるものもある。

「断面三角形のすり石」は森川 3 遺跡から多量に出土した。実測にあたりすべての資料を手を持ち「握り易く、使い勝手が良い」位置を探った。その結果、握り部の位置は、両端部のうち断面形が小さい側で、その握り方は「親指は側面の平坦部に、人差し指は上辺部に、中指から小指は張り出し部分に添えて握る」となった。

実測図は、すり面を下に、水平に置いた。握り部の端部断面形が小さい側を右側（正面右端部）に、最大幅が偏る端部側を左側（正面左端部）にして実測した。正面は、親指を添える部分となり、断面の右側を右側縁、左側を左側縁と呼称した。すり面は、左側をすり面左端部、右側をすり面右端部と呼称した。

この方法で実測した結果、形態・すり面の位置等について規則的な特徴が認められたので述べる。

(1) 森川 3 遺跡出土のすり石の特徴

森川 3 遺跡から破片を含み 372 点の断面三角形のすり石が出土した。完形品は 108 点で、すべてすり面が 1 ヲ所のものである。これらは形態から 3 つに分けられる。

1 類：(図Ⅴ-161) 厚みのある筥状で、端部付近の断面形の最大幅が端部左側に偏るもの。

66 点出土全体の 61% を占める。すり面・端部の剝離から a 類～d 類に細分される。

a 類：すり面・端部に剝離が認められないもの 31 点 (29%)、b 類：すり面に剝離が認められるものの 29 点 (27%)、c 類：端部に両面からの剝離が認められるもの 4 点 (4%)、d 類：すり面・端部のいずれにも剝離が認められるもの 2 点 (2%)。

2 類：(図Ⅴ-155) 厚みのある筥状で、最大幅が中央にあり正面が三角形を呈すもの。

29 点出土し全体の 27% を占める。

a 類：10 点 (9%)、b 類：17 点 (16%)、c 類：1 点 (1%)、d 類：1 点 (1%)。

3 類：(図Ⅴ-158) 三角ないし矩形の柱状のもの。13 点出土し全体の 12% を占める。

a 類：4 点 (4%)、b 類：7 点 (6%)、c 類：2 点 (2%) で、d 類は出土しなかった。

a 類は 43 点 (40%)、b 類は 53 点 (49%)、c 類は 7 点 (6%)、d 類は 3 点 (3%) である。

① 形態的な特徴・すり面とその位置の特徴

形態的な特徴・すり面とその位置は以下のようにまとめられる。

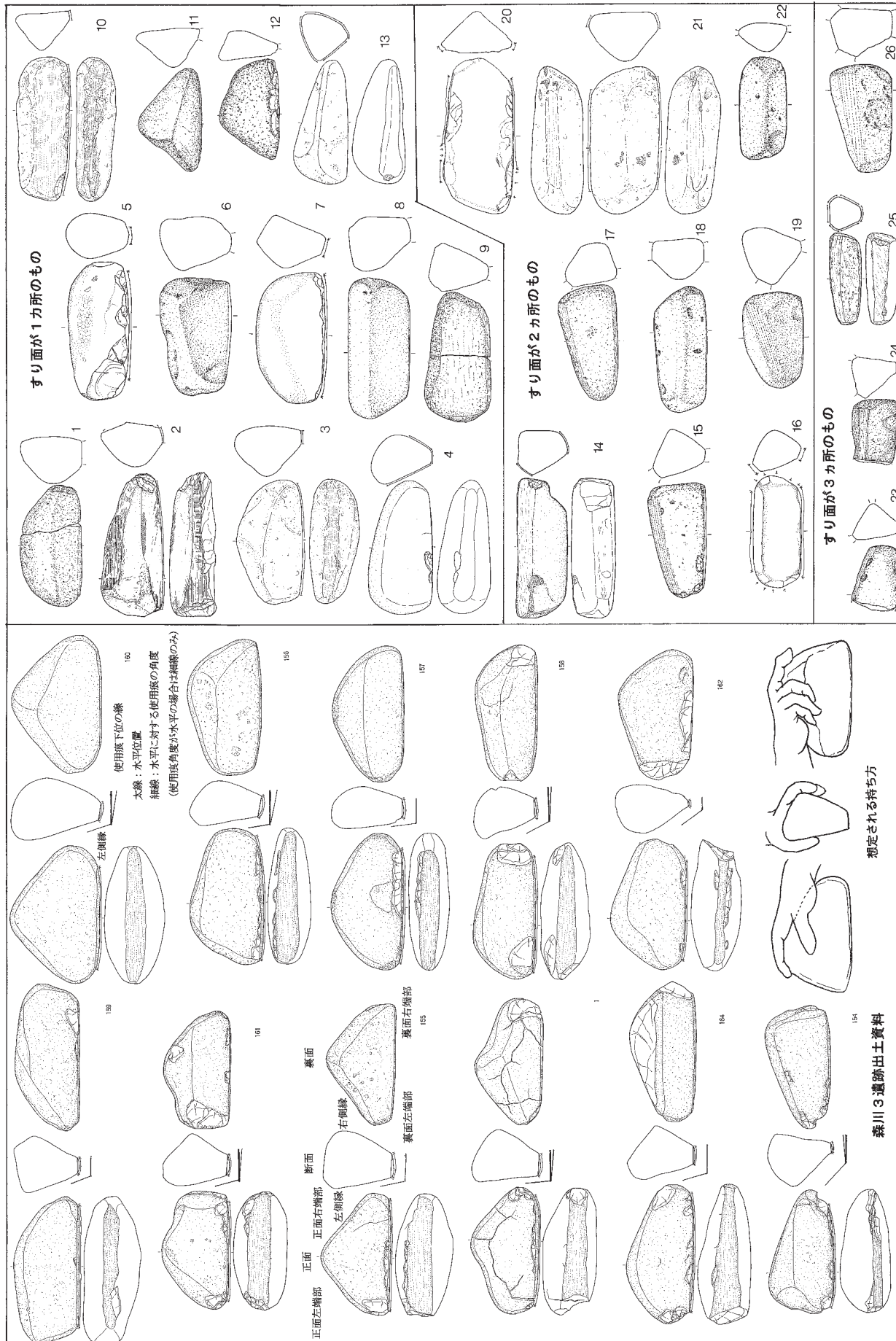
(形態的な特徴)

：厚みのある筥状のものが多い (1・2 類)。

：断面形は、三角形・半円形・三角形の一端を切ったような矩形のものがある。

：両端部を除き周縁に加工が施されたものがない。

：正面は、素材中の最も広い平坦面になるものがほとんどである。



図VI-4 断面三角形のすり石

- ：長い「鋭角をなす稜」が1ヵ所のものがほとんどである。
- ：端部に両面からの剝離が施されているものは10点（c・d類の合計：9%）で少ない。
（使用痕とその位置）
- ：すり面は「鋭角をなす稜」に認められ、2つ「鋭角をなす稜」をもつものは「より鋭角」な稜に認められる。
- ：すり面に剝離があるものは56点（b・d類の合計：52%）で、半数以上に認められる。しかし、すり面の剝離が、整形時のものなのか、機能部作り出しの際のものなのか、また、使用時の敲打によるものなのか判断が困難なものが多い。
- ：すり面の位置は三角形の一辺・半円形の場合は弦部分、台形状の場合は底辺で、いずれも最長の一辺に多い。
- ：すり面は幅8～30mmで、幅の狭いものには明瞭な剝離が認められるものが多い。
すり面の最大幅は、中心軸から正面左端部側に偏る傾向が認められる。

② 実測図の規則性

実測図位置の統一から以下の規則性を見出すことができた。

- ：正面が素材中の最も広い平坦面になるものがほとんどで、右側縁（裏面）が張り出す。
- ：すり面の位置は三角形の一辺・半円形の場合は弦部分、台形状の場合は底辺で、いずれも最長の一辺に多い傾向がある。
- ：すり面右側縁側に傾斜するものが多い。
- ：すり面の最大幅は、中心軸～左端部側に集中する傾向が認められる。

森川3遺跡のすり石には周縁の加工がほとんど認められず、素材選択段階の形状をそのまま残しており、素材の選択は「完成された石器の獲得であった」と考えることができる。このことから選択された素材の形態は、使用方法・使用目的を強く反映していると考えられる。そして、すり面の位置は使用方法を示し、使用方法是「握り部の位置」「持ち方」が大きく反映しているものと思われる。

今回、「持ち易さ」という作業仮説をもとに「握り部の位置」「持ち方」を想定し実測を行った。その結果、平坦面の位置・断面形状・最大幅の位置等に規則性を見い出すことができたことは素材の選択の段階で「持ち方」「使用面」の位置が想定され、それに基づいて一定の規則性で使われた事によって、これらの規則性が生じたものと考えられる。そして、その「持ち方」は、先述したように「握り部」の位置は、両端部のうち断面形が小さい側で、その「握り方」は「親指は側面の平坦部に、人差し指は上辺部に、中指から小指は張り出し部分に添えて握った」ものと考えられることができる。

（2） 他遺跡のすり石

断面三角形のすり石が出土している遺跡には、早期後半の白老町虎杖浜3遺跡・長万部町富野1遺跡、前期前半の千歳市キウス5遺B地区・函館市石倉貝塚、中期前半の函館市石川1遺跡等がある。これらの遺跡から出土したすり石の特徴は次のようにまとめられる。

（すり面が1ヵ所のもの）

形態　：厚みのある篋状のものが多く、柱状のものもある。

：周縁・端部に剝離が施されているものは少ない。

断面形：三角形・半円形・矩形のものがある。

すり面の位置：すり面は「鋭角をなす稜」に認められ、2つ鋭角の稜をもつものについては「より鋭角」な稜にすり面が認められる。

：すり面に剥離があるものが認められる。

：すり面の位置は三角形の一辺・半円形の場合は弦部分、台形状の場合は底辺で、いずれも最長の一辺に多い。

：すり面の最大幅は、断面形が大きい端部側に偏る傾向が認められる。

(すり面が2ヵ所のもの)

形態：断面形が三角形・矩形の柱状で両端断面形の大きさの差異が比較的小さいもの

：2つ以上ほぼ平坦な稜をもつもの

断面形：正三角形、2つの鋭角を持った二等辺三角形・半円形・矩形ないし台形のものが多い。

すり面の位置：断面形が正三角形のもの、断面形が二等辺三角形・半円形・矩形ないし台形のものは「より鋭角」な2つの稜に認められる。これらのうち断面形が二等辺三角形ものが多く、その鋭角をなす二辺の稜にすり面が認められる。

(すり面が3ヵ所のもの)

形態：柱状で両端断面形の大きさの差異が比較的小さいもの。また、三角錐状のもの

断面形：正三角形・二等辺三角形で、いずれの稜部分も鋭角である。

すり面の位置：すり面はすべての稜にある。

他遺跡の「すり石」の特徴は以上のようにまとめられる。

：形態は、すり面1ヵ所のものは厚みのある筥状のもの、2・3ヵ所のものは柱状ものが多い。

：すり面1ヵ所のものは、鋭角な稜を1ヵ所しかないもの、2ヵ所以上の鋭角な稜をもつものが認められる。前者が多く、後者はより鋭角な稜にすり面が認められている。

：すり面2ヵ所のものは2ヵ所以上の鋭角な稜にもつ素材が選択され、断面形が二等辺三角形で、二辺が鋭角をなすものが多い。

：すり面が3面のものは断面形が正三角形の柱状ものが多い。

：すり面の最大幅は、断面形が大きい端部側に偏る傾向が認められる。

このようにすり面の数によって素材の選択が異なり、その選択には規則性が窺え、すり面の位置にも「より鋭角な稜」を使用するという規則性が窺えることから、素材の選択段階で「どの稜」をすり面として「何面」使うか考慮された素材選択のように考えられる。この傾向は、森川3遺跡でも認められており、「すり面が1ヵ所のもの」のすり面の最大幅の位置についても同様な傾向を見い出すことができる。

(3) 森川3遺跡のすり石は「何故、1ヵ所のすり面のものだけなのか」

森川3遺跡のすり石の中には、2つの鋭角の稜をもち、2ヵ所のすり面をもつすり石と共通した特徴をもつものもある。しかしながら、1つの稜しか使用していない。先述したように森川3遺跡の「素材選択の段階」で選択される素材は、厚みのある筥状のもので、「鋭角の稜」が1ヵ所しかないものが多い。最大幅は中心軸より正面左端部に偏り、両端付近の断面形の大きさの差異が比較的大きく、全体の形状から「握り難い」ものも多く、「持ち替え」に適さないものが多い。また、握りやすいものでも得られる稜の長さが短く、すり面が小形化し、非効率的になる。

以上のことから森川3遺跡のすり石は、「持ち替え」を考慮した素材選択でなく、「1ヵ所のすり面」

を使用するために選択されたものと考えられる。

また、森川3遺跡では複数のすり面をもつものはないが、森川3遺跡や他遺跡出土のすり石をみるとすり面は「より鋭角な稜」に認められ、鋭角な稜を作り出すために剥離を加えているものもあった。しかし、その反面、すり面の幅が30mmを測る幅広のものもある。これはあたかも作業開始当初は「鋭角な稜」が必要で、一連の作業の中で幅広のすり面でも可能な作業内容(用途)に変化したことを示すものと考えられる。作業内容(用途)は不明であるが、複数のすり面をもつものは、最も鋭い稜を最初に使用し、そして、「持ち替え」を行いながら順次、鋭い稜から使用した可能性を指摘できる。

図Ⅳ－4－1.9.11.12.17.24(函館市石川1遺跡：中期円筒土器上層式)、2.3.10.21(長万部町富野1遺跡：早期東釧路Ⅱ式)、4.13.14.25(函館市石倉貝塚：早期後半～前期前半)、5.7.16.20(千歳市キウス5遺跡B地区：前期前半綱文式)、6.8.15.18.19.22.23.26(白老町虎杖浜3遺跡：早期後半：虎杖浜3式)

2) 北海道式石冠(図Ⅵ－5)

北海道式石冠の実測にあたり、実際に北海道式石冠をもち「握りがしっくり」した「もち易さ」の傾向を探ってみた。その結果、急角度側の端部を掌の部分にあて、緩やかな角度側の端部を指先側にして握ると「しっくりした握り」になることがわかった。このことから急角度側の端部を右側(正面右端部：握り部)に、緩やかな角度側の端部を左側(正面左端部)とし、これを実測図の正面として実測した。この結果、幾つかの規則性が得られ、特徴は次のようにまとめられる。

- 1 溝が水平のものの最大高はほぼ中央にあるものが多い。
- 2 断面両側縁の溝上端部は、頂上部から2～3cmの部分に集中するものが多い。
- 3 溝が斜位のものの最大高は中央ないしやや正面右端部側にあるものが多い。
- 4 最大高は8.5～10.5cmのものが多い。
- 5 断面左側縁は右側に倒れ、断面右側縁は垂直ないし右側に倒れ、全体も右側に倒れ気味である。
- 6 すり面は、両側縁の溝上端部を結んだ線を水平にした場合、断面右側縁の湾曲が強い。
- 7 すり面の最大幅は、剥離で不明なものも多いが、中央からすり面左端部側にあり、すり面右端部側は尖り気味になる。
- 8 溝の位置は、正面右端部が低く、正面左端部が高くなるものが多く認められた。溝上端は、斜位の頂部に沿って頂部から3cm程の位置にある。
- 9 溝が斜位のものの正面右端部が垂直気味に立ち上がる。

これらの特徴は、北海道式石冠の「形態」・「持ち方」・「使用方法」の規格性・規則性を示していると考えられ、1～2は「形態」な規格性・規則性を、3～8は「使用方法」と「使用結果」によって生じた規則性を示すものと思われる。

今回の溝がほぼ水平のものと溝が斜位のものとが出土している。溝の上端部を水平にした場合いずれも溝上端の位置は頂部から3cm程の位置に認められ、溝の位置に規則性が認められる。そして斜位の溝も、頂部から3cm程の位置にある。したがって、斜位のものも本来は、水平であったと考えることができる。斜位のは、握り部側と想定される正面右端部側が使用によるすり減り方が顕著で、正面右端部の溝の位置が低くなり、結果的に溝が斜位になったものであろう。

このように考えた場合、3の最大高の偏りは、正面右端部側の減り方が顕著のため中央にあった

最大高が中央から正面右端部側に移動したことから生じたものと考えることができる。

7については、当初同様な幅であったすり面が正面右端部側の減り方が顕著のため、正面右端部が素材の断面形が大きい中央から断面形が小さい端部側に移動することによって生じたものと考えられる。8の溝の斜位化も同様に、顕著な右端部側のすり減り方に起因する。また、9についても正面右端部側の減り方が顕著なため素材側縁中央の緩やかな湾曲部分から湾曲の大きい部分に移動することによって生じたものと推測できる。

以上のように、握り部を正面右端部に想定することによって森川3遺跡の北海道石冠の特徴のうち幾つかについて説明できる。このことから森川3遺跡の北海道石冠の「持ち方」は「急角度側の端部を掌の部分にあて、緩やかな角度側の端部を指先側にして握る」とした想定通りのように思える。

そして、最大高が8.5～10.5cmに集中する点については、使用の限界を示している様に思える。想定した「持ち方」によって正面右端部のすり減り方が顕著で、手と石皿が接触する事態が生じることに起因すると考えられる。

今回、森川3遺跡の北海道式石冠の特徴について検討してみた。北海道式石冠について多くの研究者によって論じられている。「持ち方」の解明は、使用痕・加工痕の位置等の規則性について明確にすることができる用途・使用方法を考える上で大きな役割を果たすものと考えられる。したがって、これらを考える上で、今後、実測方法の統一が必要と思われる。

今回、得られた森川3遺跡の特徴と他遺跡出土資料との比較・検討を詳細にすることが出来なかった。これについては稿を改めてするつもりである。

(熊谷)

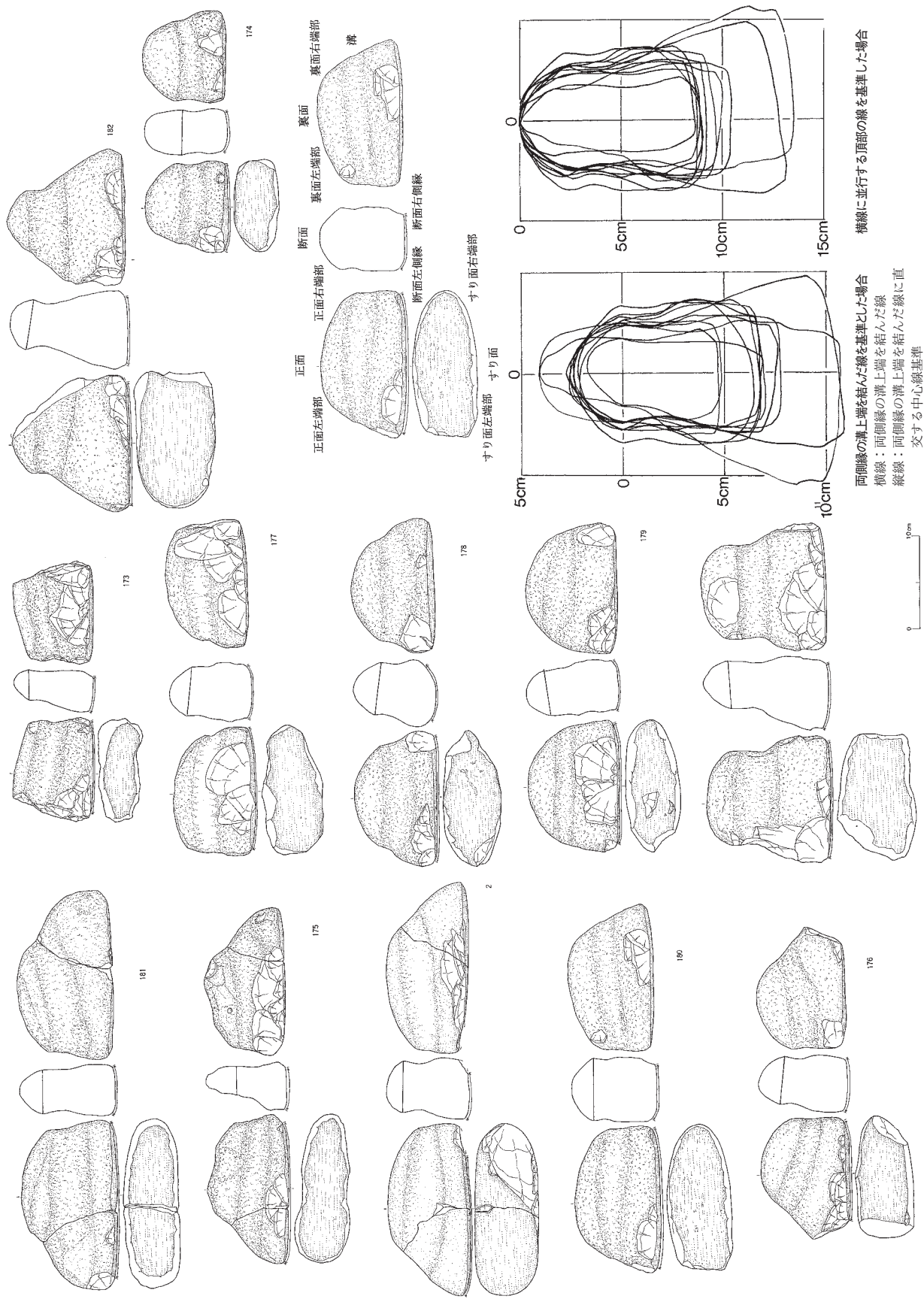


図 VI - 5 森川 3 遺跡出土の北海道式石冠